日本医史学雑誌第三十八巻第三号
平成四年九月二十日 発行　平成三年九月二十五日受付

清水耕一小伝

――とくにその著『新撰看護學　附精神病看護學』の位置づけ――

岡田靖雄

一、精神科病院改革における看護者の役割り

精神科病院の改革において看護者のはたす役割りはおおきい。近代精神医学の父ピネル（Philippe Pinel, 一七四五―一八二六）はその主著『精神病に関する医学＝哲学論』（一八〇〇年）[一]の序文で、「ドイツやイギリス、フランスで精神病者の治癒に貢献した人々が現われた。彼らは医学上の諸原理にうとく、健全な判断と漠然とした伝統に従ったまでのことであったが、ある時には好機をうかがったり、ある時には定職につかせたり、あるいは優しさと厳しい抑圧手段を適切に用いながら数多くの患者を癒した。とりわけここで挙げておきたいのは、イギリスのウィリス、スコットランドのファウレン、アムステルダムの精神病者救済院の管理者、マノスク精神病者救済院の院長プティオン、ビセートル精神病者救済院の監護人（スュルヴェイヤン）ピュサン、ロンドンのベツレーム収容院の薬剤師ハスラムらである」とかく。つづいて、「救済院の精神病者の監護の任にあって、自己の責務を熱心に果たしてきた一人の公正な人物」とかかれているのも、上記の一人ピュサンである。

ピュサン（Jean-Baptiste Pussin, 一七四六―一八一一）は鞣し革職人であったが、二五歳でオテル・デューに入院し、つづ

いて一七七一年六月五日に「つめたい体液におかされた病人」[二]としてビセートルへうつされた。間もなくよくなって子供の養育係りとなり、一七八四年には精神疾患患者病棟サン・プリの看護長（surveillant）となった。一七九三年九月にビセートルに着任したピネルは二年後にはラ・サルペトリエールにうつり、ピュサンもまねかれて一八〇二年四月にラ・サルペトリエールに看護長としてうつった。ところで最近、ピネルの求めに応じてピュサンがかいた報告書が発見された。[三]従来ピネルが精神疾患患者を鎖から解放したとされてきたが、実はピュサンが一七九七年にビセートルで原則的に鎖をやめて拘束衣にかえたことが、この報告書により判明した（部分的な鎖からの解放は一七九四年ごろからなされていたらしい）。精神疾患患者処遇改革におけるピュサンの貢献はいちおうみとめられていたが、この報告書によってそれはきわめておおきいものと確定されたのである。ピネル改革とは、ピュサンが実践していたものをラ・サルペトリエールで全面的に実行しそれを言説化したものであった。

“Surveillant”はイギリス語では superintendant、superviser と、日本語では「監護人」とも訳されているが、ピュサンは医師ではなかった（のちピネルの勧めでブリュセル大学で資格をとって医師となったが）ので、この語は「看護長」とするのが今日からみた実情にあっているのであるまいか。

さて、わたしは前稿「精神科看護史の諸問題」（本誌第三七巻第三号、一九九一年）では、東京府巣鴨病院—松沢病院の資料を中心にして、戦前における精神科看護の状況をのべた。戦前、ことに一九三五年ごろまでは精神科にくる医師はきわめてすくなかった。しかも医師の関心は（ことに巣鴨病院—松沢病院のばあい）臨床よりは研究にむかっていた。午前中は研究室にこもらず病棟にいくよう呉秀三院長はやかましくいっていたが、院長回診のときに受け持ち患者の名もしらずにとまどう医師がしばしばいた。呉院長はまたときどき当直医に「この本のこういうところをみてほしい」と電話したが、それは当直医が遊びにでるのをふせぐためであった。最初に電話をうけた看護長は「先生は重症者がいていま病棟にいます」とこたえておいて、白山の三業地に当直医迎えにはしった、ということがつたえられている。精神科にくる医師が

すくないので、呉院長は間接的な形でしか医師に注意できなかった。他方、看護者の労働条件は劣悪で、就職した看護者はいつかず、看護技術の蓄積もすすまなかった。医師のなかにも、たとえば加藤普佐次郎のように臨床に徹した人もいたが、呉院長の理念をささえていたのは少数の優秀な看護長であった。

そのような看護長の一人に、前稿でも何回か名をあげた清水耕一がいた。清水は、呉院長による巣鴨病院―松沢病院の改革・運営をささえた中心人物の一人であり、また、わたしがしらべた範囲では、専門看護教育をうけた最初の精神科看護者であった。清水にはまた一〇版をかさねた『新撰看護學　附精神病看護學』の著があり、かれは精神科看護史だけでなく一般看護史にとっても重要な人である。しかもこの本は従来の看護史ではとりあげられずにきた。

清水の生涯については加藤普佐次郎『至誠の人清水耕一君』（加藤普佐次郎・東京市、一九三六年、B六判三〇ページ、あとは「加藤著」と略称）[四]があるが、一般に流布したものではない。また清水没後の一九三五年七月一四日「東京府松沢病院看護長故清水耕一君追悼座談会」がおこなわれた（『脳』第九巻第八号、一九三五年）。ここに出席したのは池田隆徳（巣鴨病院元医員）、橋健行（松沢病院元医長）、齋藤玉男（松沢病院副院長）、氏家信（巣鴨病院元医員）、關根眞一（松沢病院医局長兼男子部医務係長）、菊地甚一（巣鴨病院元医員）、磯田庄太郎（松沢病院看護長）、石橋ハヤ（松沢病院看護長）、渡邊道雄（松沢病院女子部医務係長）、清水一隆（耕一第一男）であった（このあと、単に姓をあげるのは、この座談会での発言）。

わたしは清水耕一の第三男にあたる清水三郎氏からお話しをうかがうことができ（それによるものは、「清水三郎氏談」とします）、そのほかにいくつかの資料をあつめることができたので、清水の生涯をたどるとともに、精神科看護書についての歴史的展望のなかでの『新撰看護學　附精神病看護學』の位置づけをこころみたい。

二、その生涯

年譜はべつに表示した。

父惣平は福井藩につかえて大目付の役にあって禄百石。惣平は養子であったが、清水家からはおなじく福井藩の岡倉家に養子にいった人があり、清水家と岡倉家とは縁つづきであった。惣平は維新後は生糸商をはじめ、当時横浜で貿易商をしていた岡倉勘右衛門（天心・岡倉覚三の父）に生糸をいれていた。ところが生糸が三年つづけて暴落し、また投資していた材木屋の当主が急死してその資金も回収できなくなった（清水三郎氏談）。

一八七三年（明治六年）一一月一六日にうまれた清水は福井進歩小学校に入学し福井小学校をへて明進中学三年生にまですすんだが、中退して上京し、神田の夜学校で漢・数・簿記をまなんだ。つづいて父も上京し、岡倉家から資金をだしてもらって春日町で宿屋をやったりしたが、頭がたかくてはならやかった。そのあと刀剣を売り食いしていた。惣平は後年には東京府駒込病院の門衛のようなこともした。一九二二年一二月一〇日死亡（清水三郎氏談）。

清水は勉強したくて、本がよめるだろうと貸し本屋につとめたこともあるが、貸し本を背に一日中あるいてくると、夜はつかれて本をよむどころではなかった。そのうち広告で東京府巣鴨病院で看護夫募集しているのをみて、応募した。背がたりぬと最初ことわられたが、たのみこんで採用された（清水三郎氏談）。

東京府癲狂院は一八八六年（明治一九年）六月二〇日に向ヶ岡の地（現在東京大学農学部所在地）から小石川区巣鴨駕籠町に移転し、一八八九年三月一日に院名が東京府巣鴨病院と改称された。相馬事件の旧相馬藩主相馬誠胤（ともたね）は一八八六年一月二三日に移転前の東京府癲狂院に再入院し、移転にともない相馬家は誠胤を収容する病室を同年七月に癲狂院内につくった。誠胤は翌年二月一九日に退院。癲狂院に寄付されたその病室は相馬室と称されて、特別病室としてつかわれた。清水がまずこの相馬室患者の附添看護夫としてつとめたのは、その人物をかわれたのだろう。病室勤務の余暇には東京学館独習部に入学して漢・数・簿記をさらにまなんだ。間もなく清水は筆記試験に合格して正式に看護夫となった。

石井邦猷（くにみち）（一八三七―一八九三）は、外相もした石井菊次郎（一八六六―一九四五）の養父で、内務省官吏として監獄局長、三重県知事、佐賀県知事をつとめたあと、一八八九年元老院議官となったが、翌年非職となり、一八九三年二月三日に没

した。この人は精神疾患で巣鴨病院に入院したことがあったのか、清水は石井の死去までほぼ一年間石井宅に出張看護にあたっていた。清水は自宅から花を持参して病室にかざり、また詳細な看護日記をつけていた。夫の没後石井夫人は清水に自家の書生となることをすすめたが、清水は父母の家政を手つだう必要があると巣鴨病院の看護夫にもどった。ところで、その後も青山の墓地にいきいきした花がそなえてあるのを石井夫人が墓守りにたしかめたところ、清水がしばしば墓参して花をそなえていることをしった（加藤著）（清水は少年時代から花造りを趣味としていたようである）。

清水は巣鴨病院にもどって間もなく組長（いまの病棟看護長にあたる）代理になった。清国にたいする宣戦が布告されたのは一八九四年八月一日のことであるが、対清国戦争のきっかけとなった朝鮮の東学党蜂起は三月二九日におこった。日本赤十字社はやはやい段階で救護員派遣を準備していたのだろうか。清水は六月一日に巣鴨病院を辞職して、日本赤十字社看護人採用試験に合格して訓練をうけ、九月一日に出発して仁川、平壌、義州、九連城、大連の諸戦線で傷病兵救護にあたった。(五) そして清水は翌年六月一七日に一旦東京にもどったが、台湾出兵にあたって七月一〇日ふたたび赤十字社救護員として出発して基隆、台北ではたらき、一二月一〇日にその職をとかれた。これらのあいだに清水は実践的看護技術を身につけていったのである。

一八九六年六月一五日に三陸大津波がおこり死者二万七一二二名をだし、流失・破壊家屋は一万三九〇戸にのぼった。清水は六月から八月下旬まで赤十字社救護員として岩手県宮古、釜石に出張した。

一八八九年六月一四日にでた日本赤十字社看護婦養成規則は一年半の修学年限を規定しており、この規則にもとづく授業が開始されたのは一八九〇年四月一日のことである。男のほうについては一八九六年一〇月一日に日赤中央病院に準備看護人（救護看護人の前身）の養成所が開設された。清水の履歴書には一一月一一日養成所入校とある。一〇月一日に開校して、実際の授業は一一月一一日にはじまったのだろう。この教程は一年で、翌一八九七年一〇月一八日には日本赤十字社第一回準備看護人卒業式がおこなわれた。(六) そのとき清水が卒業生総代としてよんだ答辞は加藤著にのせられているの

で、ここにそれをかかげておこう、――

茲ニ社長閣下ヲ初メトシ諸賢ノ責臨ヲ辱フシ此盛式ヲ挙ケラルヽニ会フ生等光栄何物カ之レニ過キン抑モ本社ノ博愛慈仁ナル常ニ中外ノ人士ヲシテ感激ニ堪ヘサラシムル所以ノモノハ固ヨリ偶然ニ非サルナリ曩ニ忠君愛国ナル我等軍隊ノ高麗遼東ノ野ニ戦フ

或ハ三陸ノ海嘯ニ又々羽後ノ震災ニ皆能ク迅速救護員ヲ派シテ其緩急ニ応シ本社ノ主義ヲ全フセリ而シテ生等亦幸ニ社業ヲ負フテ軍ニ従ヒ又災禍ニ赴キ微力尽ス事ヲ得タリ今ヤ国家多事社業益拡張ノ秋ニ際シ本社大ニ見ル所アリテ去年第一回準備看護人生徒ヲ募集セラル生等亦幸ニ其撰ニ与リ学術ニ実務ニ日夜孜々トシテ講究セシモ菲才終ニ及ハサランコトヲ恐ル幸ニ教員諸哲ノ懇篤ナル薫陶ニヨリ以テ今日ノ栄ヲ荷ヒ今又社長閣下ノ高諭ヲ受ク生等不肖ナリト雖モ卑脳ニ銘ス爾来一朝事アルニ際セハ一身ヲ犠牲ニ供シ以テ本社ノ主旨ヲ貫徹セシメン事ヲ期ス茲ニ卒業生一同ニ代リ謹テ蕪辞ヲ陳シ以テ答辞トナス

明治三十年十月十八日

日本赤十字社第一回準備看護人
卒業生総代　清　水　耕　一

卒業後清水は某伯爵の自宅に出張して看護にあたったりした。清水は給料は全部親にわたしていた。仏教、ことに真宗大谷派のさかんな福井県ではだいたいそうだが、清水はとくに親孝行な人であった（清水三郎氏談）。

一八九九年一一月一一日に清水は巣鴨病院看護長に採用された（月給一二円）。そのときの医長（医務面の院長にあたる）は、法医学の片山國嘉であった。経歴がわかるところでは、それまでの看護長には軍人あがり、巡査あがりの人がおおかった。一九〇一年になって片山医長は女子部に看護指導をおいて、東京帝国大学看護講習生より永松アイをまねいてこれに任じ、また本願寺信徒の水谷秀渙および末信泉をまねいて看護長にした（片山は熱心な仏教徒であった）。女子部に女の看

護長がおかれることになって永松ほか二名が女子部看護長に任ぜられるのは、一九〇二年四月二八日、呉秀三医長になってからである。巣鴨病院だけにかぎってみれば、清水が正式の看護教育をうけた最初の看護者であったし、日本でも最初だったのであるまいか。

だが間もなく一九〇〇年に北清事変がおこり、清水は日本赤十字社看護人組長として病院船博愛丸にのりこんで営口、太沽、山海関、宇品諸港の間を往復し、年末一旦巣鴨病院にもどったものの、翌一九〇一年春にはふたたび病院船弘済丸にのりこんで、二か月ほどその任にあたった。博愛丸および弘済丸は日本赤十字社がイギリスに建造を注文し、一八九九年に完成していたものである。なお齋藤玉男「我邦に於ける精神病事業の回顧」(『脳』第七巻第一〇号、一九三三年)に、「降つて三十四年四月同院で非公式に看護講習を開き、医員二名(門脇眞枝氏及北林貞道氏)看護長一名(清水耕一氏)で、毎日午前一時間づゝ講義したが、同年八月講了した。看護長は治療介補及び繃帯学を担任した」とある。清水は一九〇一年四月一六日に巣鴨病院看護長を免職になっていることからすると、講習の開始はもっとはやかったのではなかろうか。

弘済丸をおりた清水は巣鴨病院への復帰を希望したが、東京府当局は、しょっちゅう病院をあけられてはこまる、復職は赤十字との縁がきれてからだ、と拒否した。この清水を看護長としてむかえたのが東京精神病院である。東京脳病院は一八九九年に田端の地に設立されていたが、その事務長町田が金主の一人野中をひきいれて、一九〇一年一一月五日に巣鴨庚申塚の地に設立したのが、これである(のち「保養院」と改称)。『日本赤十字』第一〇八号(一九〇二年三月一五日発行)の雑録に落花生「東京精神病院を観る」がのっている。精神病看護の話しをきこうと友人華仙氏とともに二月二三日日曜に府下北豊島郡庚申塚の東京精神病院に清水耕一看護長をたずねたのである。そして院内の様子が紹介されたあとに「附記　終りに清水氏の看護談をものする積りなりしも同氏より特に之を寄せられたれば左に之を掲ぐ」として、清水の「精神病看護法」[七]がのる。これは同誌第一二八号(一九〇三年一一月一五日発行)までつづき、『新撰看護學』のもとになる(詳細は後記)。清水がかくことに意欲的だったことがうかがえる。

東京精神病院のことは『讀賣新聞』が一九〇三年五月七日―六月二〇日に連載した「人類の最大暗黒界癲癇病院」の第二七―三〇回にもとりあげられている。この連載の記事内容は全体にきびしく批判的であって、東京精神病院もひどい病院としてえがきだされている。そのなかで清水に関する記事をみると、つぎのようである。

「看護人ハ患者百余名に対し、男女僅かに三十二名、十分なる手当の出来得べき理無し。併し看護長ハ実に適任の好人物にて、斯く少数の看護人を指揮して差支へ無く、他病院に見るを得べからざる程なりとぞ。看護長の名ハ清水耕一と呼び、十四五歳の頃より、巣鴨病院の看護人となり、多年練習を積み、赤十字社病院に入り、組長とまでなりし位なれバ、一通り看護学の素養あり、且つ博愛慈善の精神に富み、部下を督励して、医師にも患者にも不平無きやう調和を計れる由に聞く」（第二八回）と、この記事に異例な書き方である。このあと第二九回には看護人のひどさをかいて、「食物を奪ひ物品を掠むるなどハ、無論有るべき事実なれども、清水耕一と云へる良看護長あるによりて、他の病院の如く甚しきに至らざるなり」、「本院の清水耕一、何程謹厳に事務を執るも、総ての看護人をして明暗の別無く、其命令に服従せしむること能はざるべし」とする。つづく第三〇回に、薄給と人員不足とのために四月に看護人が同盟罷業をくわだてたとある。

一九〇四年に対ロシア戦争がはじまるにおよび清水はまた日本赤十字社看護人長として、病院船博愛丸にのりこんで、翌年末まで大連、仁川、宇品の諸港を往復五〇回余りにおよんだ。幸い、「明治三十七年八月四日写す」と記された写真が清水三郎氏のところにあった（**写真1**）、これが日本赤十字社看護人長としての正装なのだろう。

帰還の翌年はやい一九〇六年一月二九日に清水は巣鴨病院看護長に復帰した。さきに東京府庁は、赤十字社との関係があるうちは復職はこまるとの態度をとっていた。東京府癲狂院の治療が帝国大学医科大学に委託されたときから、院長制は廃止されて看護者関係の人事権は東京府庁にあった（「看護長看護人ノ職務ハ治療成績ノ如何ニ関スルヲ以テ医長ニ於テ之ヲ監督指揮シ其進退黜陟ハ事務掛ニ商議スル事」、――一八八七年文書）。一九〇四年になって、四月一日から巣鴨病院は院長制に復帰して、呉医長が院長になった。職員（院長、医員、調剤掛、看護長、事務掛）の進退については院長が府知事に具申し、看

護人ほかの傭い入れ、解傭は院長の権限になった。実質的には看護長についての人事権も院長のものとなった。そして呉院長のつよい要望によって清水の看護長復帰が実現したのである。

一九〇八年一二月二五日には『新撰看護學　附精神病看護學』が南江堂から出版され、これは一〇版をかさねることになる。

芦原金次郎（一八五〇―一九三七）は巣鴨病院―松沢病院の名物患者であった、というよりは、もっとも有名な「将軍」だったといってよい（かれは「将軍」よりは「帝」を称することのほうがおおかったが）。清水は将軍の日常をこまかく記録し、『芦原将軍伝』をかきあげていたらしいが、その原稿はうしなわれている。一九一〇年七月九日に乃木希典将軍は癈兵院経営の参考にするために巣鴨病院を見学した。そのとき芦原将軍と会見した様子が清水により記録されている（「座談会―蘆原将軍を語る」、『診断と治療』第一九巻第五号、一九三二年、中で村松常雄が引用）。これが『芦原将軍伝』の一部分だったのだろう。この記録をあげておこう――。

写真 1　清水耕一（1904年8月4日）
（清水三郎氏蔵）

明治四十三年七月九日乃木将軍来り謁す

陸軍大将乃木希典、同中将齋藤太三郎、同歩兵大佐椿晃、同三等軍医正正村其一、同二等軍医安村光亨等を率ゐて来院、院長呉秀三博士の先導により親しく其居室に訪ひ感慨無量互に口を開かざること数分、乃木将軍静かに、蘆原を慰め「元気で結構である」と云ひも終らざるに破顔一笑「余り俺れを病人扱ひするな、其れよりは御前こそ旅順では随分心配したらう。あの戦など俺にやらせるとあれ程までに士卒は殺さなんだ。だが二〇三高地の占領と二龍山砲台の突撃

なんぞは実に痛快であつた。二〇三高地の占領は実に旅順の死命を制したものだ」云々。会話十数分乃木将軍去るに臨み、蘆原を顧みて「随分御元気で」「あんたも丈夫で」と両雄は暫し訣別を惜しんだ。

もって清水の文章力がよみとれよう。

六〇六号（サルヴァルサン）は巣鴨病院では一九一〇年から北里柴三郎より譲渡をうけて麻痺性癡呆患者に試用をはじめ[八]（当時は筋肉内注射）、一九一三年支出ではこの薬品代が二〇六・三円にのぼっている。この注射は清水がおこなっていたことがつたえられている。

ところで、国は清水が巣鴨病院に腰をおろしていることをゆるさなかった。一九一一年の辛亥革命および一九一五年のシベリヤ出兵に際し、清水はまたも日本赤十字社看護人としての職務に服した。辛亥革命のとき清水は漢口で従務したが、このときの従務期間は四か月であった。当時東京府の恩給年限は一五年であったが、一旦看護長をやめればそれまでの勤務年限が無効になる。そこで日本赤十字社看護人として従務すべきかどうか清水はまよったが、呉院長からも「国家のために」と激励されて派遣に応じた。それが四か月ですんでしまって、清水は力抜けした（加藤著）。

ここで「誓約年限」（義務年限）[九]についてみておかなくてはならない。一八八九年六月の日本赤十字社看護婦養成規則の第二条には、「看護婦生徒ヲ志願スル者ハ修業年間専ラ之ニ従事シ且ツ卒業后二ヶ年間病院ニ於テ看護婦ノ業務ニ服シ後二十年間ハ身上ニ何等ノ異動ヲ生スルモ国家有事ノ日ニ際セハ速ニ本社ノ召集ニ応シ患者看護ニ尽力センコトヲ誓フ可シ」とあるのがそれである。一八九八年八月の準備看護婦規則では二〇年の誓約年限が一五年に短縮された（支部は一五年から一〇年に）。看護人のほうでは、一八九六年五月の準備看護人規則では誓約年限は一五年となっていた。一九〇三年三月の救護員採用規則での誓約年限は、書記、調剤員補が五年、看護婦長が一五年、看護婦が一二年、看護人長、輸長が五年、看護人が一〇年であった。さらに一九二二年五月の日本赤十字社救護員任用規則では、救護看護婦長、救護看護婦の誓約年限は一二年、救護看護人長、救護看護人のそれは一〇年とされた。一九〇三年規則で看護婦長の一五年は看護婦

として採用された時点から、看護人長の五年は看護人に採用された時点から通算される。

清水にもどってみると、清水は一九〇〇年に看護人組長として応召している。辛亥革命のときには清水の誓約年限はすでにおわっているので、清水はまよったのだろう。まよいながらも清水は、一九一一年および一九一八年の召集に応じた。日本赤十字社としても清水に期待するところがおおきかったに違いない。

さて、シベリヤ出兵のときは、病院の看護人が不平をいだき、毎晩のように廊下を酒樽をかつぎまわってこまったが、こういうのはこれまでの戦争にはみられないことであった（加藤著）。これはシベリヤ出兵の不条理に由来したものか、そういう時世がきていたのだろうか。

巣鴨病院が荏原郡松沢村へ移転することは一九一七年九月に決定されており、一九一八年三月に移転地での新築工事が起工された。清水は一九一九年七月三一日に巣鴨病院看護長に復帰し、このあとは辞職することなくその生涯をおえることになる。新病院への移転――患者移動――は一九一九年一一月七日におこなわれたが、このときの大移動には軍隊を相い手に経験をかさねた清水の力量がおおいに役だった。

清水は松沢病院で男子部の首席看護長であった。齋藤玉男が呉院長についてかたっているところ（「巣鴨病院を語る座談会」、『救治會々報』第五六号、一九三七年）では、「松沢病院の時に外の囲ひが非常に簡単なので、清水君が『これぢや我々は仕事が出来ません』といふと『病人の囲ひは看護人の目で囲ひせよ、垣根に頼るからいかん』といはれた」。清水は女子部の石橋ハヤ看護長（永松看護長の縁つづき、ともに佐賀県出身で松沢病院の女子看護部は佐賀県出身者がおおかった）とともに、こういう呉院長のもとで看護部を指導していった。

といっても、困難はおおかった。とくに問題であったのは、看護人の待遇が劣悪なためになかなかその人をえられなかったことである。前稿「精神科看護史の諸問題」でものべたとおり、労働争議も何回かあった。一九一九年の病院移転前のものは、労働条件改善の要求だけにおわったようである。一九二三年、一九二四年、そして一九三〇年と、労働争議の

勢力は男子看護部につよかったから、とうぜん清水がその一番の矢表にたたされた。

一九二四年争議については金子嗣郎が記載している「戦前における松沢病院の労働争議」(一〇)にくわしいので、それによって動きをみよう。一九二四年三月二六日看護人七六名連署による、教育方法、待遇などの改善についての「自覚セル我々ノ改善ニ就テノ要求」がだされた。翌日午後、院長・副院長・主事〔事務長〕・両医長が清水看護長より報告をうけたのち、看護人代表七名および清水看護長が説明した。院長から、改善の方向をとるとの回答があって、散会。翌日主事・委員の会合に医長一名と清水看護長とが列席。委員側は増給要求にしぼって主張。同日夜清水看護長より委員に、まえ二等看護人から一等看護人へ、さらに組長への昇格のとき五銭の増給があったのが自然廃止されていた、それを復活したい、と申し出があった。二九日に院長・主事・医長の協議できまった線により同日夜清水看護長が看護人代表に、

「組長　拾五銭　一等看護人　拾銭　二等看護人　五銭

外ニ看護法卒業者ハ拾銭　仝上修業者ハ拾銭　但し　現ニ資格増額ヲ受ケテイルモノハ除ク　マタ軍人看護卒ハ看護法修業ト見做ス」

と病院側回答をしめした。これにたいし看護人側は、要求の最低線を決議して清水看護長にわたした。その夜清水看護長は三名の代表と面会して、府財政がくるしくて回答の線がぎりぎりであることを説明したところ、二名はほぼ納得し、一名は退室した。翌三月一日清水看護長は組長、委員の有力者を一人ずつよんで意見をきいたところ、大勢は病院案で納得したが三名の強硬派があった。これで争議はいちおう収拾された。そして主謀者とみなされた組長一名、一等看護人四名は、五〇日後から一年後と日をずらしてやめさせられた。

ある程度話し合いをして、強硬派を妥協派からきりはなし、最後は強硬派をきる、という線である。そして首席看護長である清水が先頭にたって接衝にあたらなくてはならなかった。清水三郎氏は、駒込の自宅のまわりにやたらにビラがはられていたことをおぼえておられる。それはいつの争議のことだったか。しかし清水は仕事のことは家族にあまりはなさ

ぬほうで、これら争議に際しても根をあげる様子はみせずにいた。事を処するにあたっての清水の心情がどうであったか、はわからない。

清水が部下たちの窮状をよく承知していてその救済をつよくのぞんでいたことは、一九二六年六月にかれが三宅院長にあてたつぎの文書（『大正十五年一月起　任免賞罰ニ関スル書類控　看護長』[一一]所載、岡田靖雄『私説松沢病院史』、岩崎学術出版社・東京、一九八一年、に収録）からわかる――、

抑救済ノ事業タルヤ難事中ノ至難ニ属スルモノニシテ到底机上ノ空論ヲ以テ忖度スベキモノニアラズ就中精神病者ノ衛生、看護、監守等ヲ忽緒ニセザルニハ健全ナル精神ト周到ナル注意トヲ要シ且ツ其道ニ熟練シ常ニ博愛、慈善ノ志ヲ有シ素行端正ニシテ侵スベカラザル美風ト威信トヲ併セ有スルモノニアラザレバ能ハザルナリ

以上ノ態面ヲ維持シ完全ニ遂行シテ大過ナカラシメントスルニハ尠クトモ、看護人ノ待遇ヲ改善シ教養アル適材ヲ諸方ニ求メ各自生活ノ安定ヲ得永ク其緒ニ安セシメ現在就職者ノ不安ト動揺トヲ掃除シ一意専心与ヘラレシ職務ニ尽瘁セシムルニ外ナラス

昨年本年度予算案ヲ提出スルニ方リ上司ハ看護人ノ待遇改善ノ主旨ニ元シ議案ヲ提出シ府会ニ要求セラレタルニ府議ハ克ク我等ノ切ナル希望ヲ容レ増給原案ヲ可決セラレタリト聞キ大ニ欣幸トセル所ナリ

今ヤ内外多事稍モスレハ社会ノ悪風潮ニ流レントスル折柄其局ニ方ルモノヽ大ニ注意ヲ要スベキ次第ト考慮シ茲ニ苦言ヲ呈シ敢テ閣下ノ賢慮ヲ仰ク

恐惶謹言

看護長　清水耕一

府立松沢病院長三宅鑛一殿

看護夫俸給調査表（大正十五年五月三十一日現在）

看護夫百〇八名

日給額　金九拾参円六銭也
日給平均額　金八拾四銭三厘強
以上ハ看護夫百三十六名ノ内ヨリ看護手二名及見習看護夫二十六名ヲ除キタル計算ナリ
看護婦俸給調査表（大正十五年五月三十一日現在）
看護婦七十四名
日給額　金六拾壱円六銭
日給平均額　金八拾弐銭五厘強
以上ハ看護婦八拾参名ノ内ヨリ看護手二名及見習穫護婦七名除キタル計算ナリ

これにつづいて各人ノ日給明細表がつけられている。

清水が当面したもう一つの大問題は、一九二三年九月一日の関東大震災であった。松沢病院での病棟全壊は二棟で、院内での死者は女の自費開放室で患者につきそっていた家族の二名だけであった。一日夜は全患者が松林で露宿し、翌日からは屋内でねた。清水はこの間、計画を紙に明記してそれを幹部にもちまわって了解をえ、そののち部下にそれをしめして命令の徹底を期する、というやり方で各部署の連絡を確実にした。清水の家族は四日になって病院からの通知で、はじめてその生存をしった。

一九二四年一月二六日に清水は社会事業功労者として表彰され、三月二〇日には呉院長、三宅副院長はじめ巣鴨以来の主要医員、齋藤紀一、松沢病院男女看護会、精神病者救治会などを発企人とする祝賀会が松沢病院でひらかれた。記念品代をよせるもの三〇〇名、祝賀会来会者は一〇〇名におよんだ。また五月には呉院長が長文の題言をふくむ記念書帖をおくった。その文章は加藤著に全文おさめられている。

一九二五年六月末には呉秀三院長が定年退職し、三宅鐳一副院長が昇格した。

一九三〇年三月四日には、看護人の慰労休暇をかってに拒否した組長を非難する四二名署名の文書が清水看護長あて提出され、看護人代表との第二回の会合で清水は、時期をみて問題の組長をやめさせることを約束したようである。だがそののち看護人側の要求が拡大してくると、病院側は五月五日に、中心となった六名の看護人を清水看護長から三宅院長あての上申書にもとづき解雇した。それにたいし、看護婦八〇名も合流して二〇〇余名の看護人が争議にたちあがったが、世田谷署の介入もあっておさえつけられた（くすぶりは残存し、小騒動はおきかけたが、おおきく表面化することはなかった）（金子の記載にもとづく）。

一九三三年には院内の労働運動は完全におさえこまれていた。このころ府庁および松沢病院医局のあいだで副院長―将来の専任院長（東京帝国大学医学部教授の兼任でない）の問題がくすぶりつづけていたが、これが看護科にどうひびいていたか。一九三四年九月一五日には病者対文藝春秋チーム野球試合がおこなわれ、のちの作家永井龍男が文藝春秋チーム二塁手として活躍した。このあたり、本格的戦時体制のまえの晴れ間だったのである。

清水は勤勉すぎるほどに勤勉で、ちょっとしたことではやすまずにきたが、ここで病いにふした。もっともこれまで病気はよくしていて、あちこちの病気をしたが、すぐによくなっていた。一九一一年中国で従務のとき胆石症発作があったが、重曹―食塩療法で「なおしていた」。一九三四年一一月二〇日に清水は胆石症を発して、東京帝国大学医学部附属病院島薗内科に入院し、年末に退院した。ところが翌年一月一八日から胆嚢炎が悪化した。そのまえ一月一六日に「三宅先生の結婚式」（鑛一長男仁のか）にでたのが、公的な場に顔をだす最後になった。一月三〇日に清水は加藤普佐次郎を病床によび、石井菊次郎子爵にお祝いとご挨拶との手紙をだそうと下書きはかいたがだせずにいる、また老君の看護日記は当時の執事に托した、このことを子爵につたえてほしい、とかたった。

そして清水は、石井子爵からの見舞いの生花をめでながら、二月二日に死去した。満六一歳、数えでは六三歳であった。

告別式は二月六日に本郷の自宅でおこなわれたが、会葬者一〇〇〇名余り、ときの院長三宅鑛一は長文の弔詞をよみ、東京府衛生懇話会会長軽部修伯、日本赤十字社社長徳川家達などからの弔詞も朗読された。二月八日お骨は現台東区西浅草の西光寺（浄土真宗大谷派）におさめられた、戒名誠光院釋恵賢居士、現在清水家墓地は同院内太田家墓地に合祀されている（清水の妹こずえが太田毅と結婚した）。

三、その人

清水にたいする周囲の評価をみておこう。橋は、「巣鴨の呉先生にも受けがよく、引続いて三宅先生には大変なもので、今でも『清水君が亡くなつてから不自由で、寂しい、松沢に行つてもつまりませんよ』といつて居られる位です」とかたっている。その三宅は、「我が国精神神経病学発展の跡を顧みて――三宅名誉教授を囲んで――」（日本醫事新報、第一四四二号、一九五一年）で、「殊に精神病院は治療所であり、監置所でないといつても、逃げられては困るので、その間に矛盾があり、看護人の心構えを指導するのに清水看護長等の力は大したものでした。氏は時に死を賭して働かれたことも何回であつたでしよう。〔中略〕巣鴨病院や松沢の病院では他で困つた人を収容すべしとの呉院長のお考えでしたから、随分暴れん坊が入り、清水看護長は死を賭して働かれたことが一再ではありませんでした。実に当時の患者には随分と骨が折れたものです」とかたっている。

おなじところで金子準二は「あの人のお弟子さんは全国に沢山おります」とのべている。加藤著は、「又君は病院内に於て困難なる看護人の教育と統制に当る外、院内で養成した看護人を院外に推薦すると云ふ大事業があつて、時には各病院へ、又時には各家庭へ派出せしむるのであるが、其間医師、家族、患者、看護人並に其の家族の間を適当に斡旋する事は実に並大抵の仕事ではなかつた事と思はれる」とかく。

患者の状態をみわける目もずばぬけていた。一九八一年四月五日の「清水耕一看護長を偲ぶ会」での關根眞一の特別講

演を山下銀蔵が紹介しているところ（『精神科看護五十年　つぶやき』、牧野出版・東京、一九八一年）では、当時男子部医長の關根が男の患者に散歩にだしてくれといわれて、だしたところ無断離院した。ところが清水は、回診のとき医長がその人の要求をいれて、こういう結果になるに違いないと予測して、病院周辺に看護者を配置しておいたので、患者はすぐに保護された。失敗したよという關根に清水は、「いや、先生が患者の意見をきいてやったのはいいことです、看護者に隙がありました」とこたえたという。(一三)

關根眞一（『随筆落葉かき』、關根眞一・東村山市、一九七一年）は、負傷した患者に包帯すると、「清水看護長の包帯はおちないのに、先生はへただ」と患者にいわれたことをのべている、日本赤十字社救護員だったからには、包帯術にたくみだったのは当然ともいえよう。一時期分裂病患者にリンゲル氏液静脈注射がおこなわれ、また梅毒性疾患患者へのサルヴァルサン静脈注射も導入された。これらの患者は週一回外来にあつめて当番医員が注射し、清水が助手をしていた。注射も医員よりも清水がはやく上達していたことは、座談会で何人もがかたり、關根ものべている。医員が何回もつついて患者がおこりだすのを清水はこまった顔でみていて、医員が「たのむよ」というと、清水は一発で針を血管にいれた（自分からでしゃばることは決してしなかったのである）。従業員・患者とも清水を「日本一の注射王」とよんでいた（長谷川花溪「看護王清水耕一氏を弔ふの辞」、『松のみどり』（患者文集）第二五七号、一九三〇年）。

労働争議でも、ストライキ党の数はおおくても、大勢の清水の腹心がもってくる情報にもとづいてストライキ党のほとんどを清水は手なずけ、最後には中心の数名だけがのこる、という形になる。「あの手際には僕らも感心した」（橋）と評価されるほどであった。こういうところ、副院長ぐらいできた（氏家）、「副院長以上か知れないよ」（橋）、といわれた。

つぎにその人柄をみよう。「至誠の人」といわれるだけにたいへんまじめな人であり、医者には絶対服従という線はかたくまもっていた。部下の看護人にたいしては権限をもっていただけに、やかましかった。同時に、親切で、よくおしえてくれ、おこるときははげしいが、五分もすると何事もなかったように仕事をいいつける（磯田）。だれにも面倒見はよく

て、池田（医師）は家庭面でいろいろと世話をうけ、親孝行であるとともに、夫をはやくなくした妹の面倒もよくみていた（清水三郎氏談）。如才なさもあって、氏家はその例として、『新撰看護學』をそのときどきの医師にみてもらったことをあげている。新入りの医師を、顔をたてながらうまくそだてた（菊地）。午前中病室回診にでない医師をひっぱりだすのがうまくて、ニコニコして医局にはいってきた清水に「先生どうですか」といわれると、病室にでざるをえなくなった（關根）。たいへん几帳面で、なんでもすぐにやる。この点は家庭でも目だったようで、清水三郎氏談では、手紙をもらうとその日のうちに手紙をかくし、庭の手入れもおもいたてば、雨がふってもやるほうだった。また、こまかく記録をのこす人で、こちらが思い違いをしていると「これご覧なさい」とふるい記録をつきつけられて、よわった（關根）。勝負事はきらいで、遊びはしなかった。趣味は園芸、ことに花造り。渡邊は清水から菊造りをならったが、その教え方も要をえたものであった。

家庭で清水は口やかましく、礼儀作法のしつけもうるさかったが、手をあげることはなく、子煩悩で子供をすごくかわいがった。清水三郎氏は、デパートによくつれていかれたこと、また風呂にもよくつれていかれて、あらってもらった記憶がつよくのこっている。奥さんも大事にし、「自分はよく妻ノロといはれた」と石橋にはなしていた。病臥していた妻に、何年かにわたりリンゲルをもっていって注射していた（橋）。手先は器用で、また字は達筆であった。仕事には勤勉すぎるほどで、ちょっとのことではやすまず、「戦地では血便がでても仕事はつづけていた」とかたっていた（清水三郎氏談）。

その体格は清水三郎氏によれば、身長は五尺一寸ぐらい、ふとって太鼓腹だった。關根は、清水がなんでもすぐに実行することを、「三宅先生などの用事でも、一々急がなくていゝことでも、小さい肥つた毬のやうな体をコロコロして、はア〳〵いひ乍ら、何事も急いで、直ぐ実行してしまふ」とのべている。アルコールはビール一本を二回にわけてのむ程度、しかし「気持が悪いという時にはいつでもビールを飲んで居られました」（石橋）。喘息ではないが咳持ちで、たばこは普段はすわなかったが、看護科の机にはいれておいて他人にはすすめた（清水三郎氏談）。甘味はすきで、「お茶を飲むと

食べられないといつて、餅菓子のこんな五銭も七銭もするのを七つ位食べました」（石橋）。加藤普佐次郎と、どれだけたべられるか賭けをしたこともある（橋）。

清水は本郷区駒込にすんでいた。はじめの妻たかが病没し、りのと再婚したが、りのも清水にさきだって一九三三年に五八歳でなくなった。たかとのあいだに一隆、寛（たかし）、りのとのあいだに三郎、初枝、五郎の計五児があった。いまご存命なのは三郎氏（一九一三年うまれ、薬剤師）だけである。駒込の家は戦災にあい、呉院長がかいた祝賀書帖はじめ遺品はうしなわれている。清水がかきためていたはずのものも、みることができない。

四、『新撰看護學』とその位置づけ

——附、精神科看護學書のこと——

『新撰看護學』は看護人がかいた看護学書であり、すくなくとも一〇版をかさねているにもかかわらず、一般看護史でこれに言及するものをみたことがない。そこでこの本をくわしく紹介し、また精神科看護関係書（一般看護学書のなかの精神科関係記述をふくむ）のなかでの、この本の位置づけをこころみよう。

すでにしるしたように、一九〇二年二月二三日に東京精神病院を訪問した落花生は清水看護長の看護談をものしようとしたところ、「精神病看護法」の文章がよせられた。こうして『日本赤十字』第一〇八号から「精神病看護学」の連載がはじまった。まずその内容を順次みていこう。[一四] なお、各連載分の順序番号は付されていない。

第一〇八号（一九〇二年三月一五日発行）（雑録欄に）三ページ

精神病定義／精神症状（一）感覚障碍及び妄想　(イ)感覚障碍　(ロ)妄想

第一一一号（一九〇二年六月一五日発行）（雑録欄に）六ページ

（二）精神障碍：白癡、癡愚、欝憂狂、躁狂、妄想狂（急性、慢性）／妄想狂者の書簡／慢性妄想狂者の看護者に寄せた

る述懐／慢性妄想狂の画

第一一二号（一九〇二年七月一五日発行）〔目次にでているが、そのページにでていない〕

第一一三号（一九〇二年八月一五日発行）（雑録欄に）三ページ強

癲癇狂、臓躁狂、心気狂

第一一四号（一九〇二年九月一五日発行）〔目次にでているが、該当ページ落丁〕

第一一六号（一九〇二年一一月一五日発行）（雑録欄に）二ページ

中毒狂　看護法各論　第一章（心得、看護日記）

第一二一号（一九〇三年四月一五日発行）（雑録欄に）三ページ強

体重、体温の測定法及び其用紙／附記　慢性妄想狂の看護長に寄せたる述懐

第一二五号（一九〇三年八月一五日発行）（衛生欄に）二・五ページ

呼吸の状況及其測定法、心動／被害妄想狂者の書翰

第一二六号（一九〇三年九月一五日発行）（衛生欄に）二・五ページ

浴法／麻痺狂者の書翰、同氏の書

第一二七号（一九〇三年一〇月一五日発行）（衛生欄に）二ページ

薬用法／妄想性癡狂〇〇〇〇氏の翰、報告書

第一二八号（一九〇三年一一月一五日発行）（衛生欄に）二・五ページ

便通及浣腸法／躁狂性癡狂〇〇〇〇〇〇氏の書簡

清水は一九〇四年二月一六日は対ロシヤ戦争で召集されたので、『日本赤十字』への連載はこれで中断したようである。患者作品を適当におりこんで、よませる工夫をしていることは注目すべきだろう。第一二七号に「妄想性癡狂」がでてい

るのは、呉秀三が導入したクレペリン体系の影響がではじめているのだろう。なおこの頃の『日本赤十字』には看護者による文章はほかに掲載されていない。

『新撰看護學　附精神病看護學』は一九〇八年一二月二五日に南江堂から初版をだし、一九一〇年、一九一二年、一九一四年、一九一七年、一九一九年、一九二一年、一九二五年、一九三三年と版をかさねた。わたしがみることができたのは、一九二五年一月二〇日発行の第九版である（**写真2**）。「第九版緒言」に「著者は常に此書の大成を期せんと苦心焦慮すれども尚ほ未だ完全の域に達せざるを遺憾とするも前版に比し稍や面目を改め所々に訂正を施したり」とあるところをみると、版をかさねるごとに増補改訂してきたようである。しかし、どこをどう訂正してきたかはわからないので、第九版によって紹介するしかない。

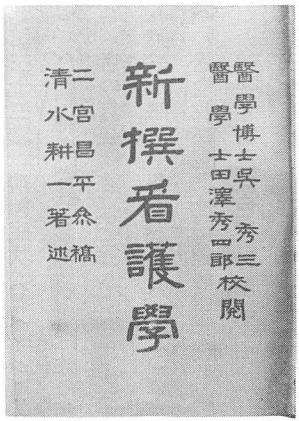

写真2　『新撰看護學』内表紙

内表紙に校閲者として名のならんでいる田澤秀四郎は一九〇四年東京帝国大学医科大学を卒業、一九〇五年二月二日より一九〇九年一月二五日まで巣鴨病院医員および東京帝国大学医科大学助手、一九一七年八月二九日に開設された東山脳病院の院長となったが、一九二〇年一月二日死去。二宮昌平は一九〇五年二月二〇日から一九一一年一二月八日まで巣鴨病院薬剤師で、おそらく一九〇七年六月から薬局長、「例言」に、本書の内容調剤学は二宮先生の担任起稿されたものだとある。この本はA五判、緒言・目次などが二四ページ、本文四六二ページ、定価四円である。本文の構成はつぎのようである――、

緒論（四ページ）〔看護人心得〕

第一編　解剖及び生理（八六ページ）

第二編　看護法（五〇ページ）：衛生学上の注意、看護法各論、伝染病及び其看護法、伝染病各論、消毒法

第三編　治療介補（三六ページ）：治療介補法、按摩法
第四編　救急看護法（二五ページ）：外傷、危篤症及び仮死、雑病
第五編　繃帯学（三二ページ）：繃帯術、巻軸帯用法、三角巾使用法、複帯用法、副木、義布斯繃帯、安保装置
第六編　手術介補附外科器械取扱法（七ページ）：手術前準備
第七編　外科器械（一五ページ）：外科器械の名称及び用法
第八編　衛生法大意（一四ページ）：土地及び家屋、飲食、衣服、運動及び散歩
第九編　精神病及び看護学（六三ページ）〔内容は後記〕
第十編　薬餌使用法及び調剤法（一三一ページ）：緒言、総論、各論

第九編をのぞく各編の内容を評価する力はないが、実際的な技術を具体的にのべている点が特徴といえそうである。第一〇編はとくにくわしく、日本薬局方所載全薬品名、調剤法までのべている。また全体で二一一図をおさめて、図が豊富であることも本書の特色であろう。なお全体が振り仮名つきである。

つぎに第九編の内容をみておこう（さわりとおもえる文章を抜き書き）（章の番号は全編の通し番号である）、——

第三十三章　精神症状（四ページ）：精神病、知覚障碍（妄覚）及び妄想

「精神者とは大脳皮質汎延性の疾患にして精神障碍を以て主候となし一定の経過を以て終る疾患を云ひ」、「精神病者の無強制治療を行ふに至れり」

第三十四章　各論（三一ページ）：早発性癡呆（類破瓜病、破瓜病、緊張病、妄想性癡呆）、偏執病、麻痺性癡呆、躁鬱病、回帰性及び定期性精神病、癲癇性精神病、ヒステリー、中毒性精神病、退行期精神病（鬱憂病、老耄性癡呆）、先天性精神発育制止（白癡、癡愚）

第三十五章　精神病看護法（一ページ）〔心得〕

「忍耐慈愛篤実克己心」、「患者の言語挙動を知了し置くべし」、「沈着温順の目」、「丁重に謹慎に健康の人に接するが如くすべし」、「看護者自己の機転」、「断じて嘲笑罵詈等のことはなすべからず」、「記載を確実にすべし」

第三十六章　各論（二七ページ）：妄想を有する患者に対する看護、躁揚状態に於ける患者の看護、抑鬱状態に於ける患者の看護、拒食患者に対する看護附人工栄養法、癲癇患者に対する看護、患者昏迷状態時に於ける看護、不潔患者の看護、精神誘導法〔作業、運動〕、持続浴法、色情亢進者の看護、病症の報告、挙動帳

「〔躁揚〕患者の破壊的行為を抑制するに住時は蒲団に包みて其を縛り或は手錠、足錠等の強制具を用ゐたりしも今は全く此法を廃し一般患者の看護と異なるなきに至れり」、「呉博士は病院構内所々に作業所を設られ多数の収容患者をして各其得意とする手業に随ひ農業植物培養牧畜紙漉細工状袋張裁縫洗濯編物機織等の作業を与へられき患者は得意気に談笑しつゝ其手業に従事するさま殆んど尋常の人に異ならざるを見る患者の幸福や其れ大ならん」

「挙動帳」とは、精神科における看護日記のふるい呼び方である。目次では「挙動帳」となっているが、本文中見出しは「第十二　看護日記」である。一二ページのこの項目には「患者挙動容体記載例」が六・五ページはいっている。「看護人其傍らに座し験温験脈を行はんとしたるに肯んぜずして曰く」といった形で、患者の状態を一方的に記載するのでなくて、看護人・医員の動きも記載している。また患者書翰、芦原帝勅語、患者隠句といった患者作品が四・五ページいれられている。また、各論の妄想性癡呆のところに、木製の大砲を脇にした芦原金次郎の写真がのせられている。[一五]

浦野シマ[一六]によれば、一九三三年八月二五日にこの本の改訂第一〇版がでた。三宅鑛一博士序があり、關根眞一学士校閲となり、本文四六六ページ、精神病看護法は六三ページ。看護婦規則が付録されている。この版では、マラリヤ療法、持続睡眠療法における看護もはいっている。

『日本赤十字』所載の「精神病看護法」と本書とを比較すると、そのままの文章もあり、『日本赤十字』所載のものが本書の母胎となったことが察せられる。

ところで追悼座談会で副院長齋藤が「清水君が著はした『新撰看護學』ですが、その版権を永久に記念事業に残したい。今は松沢病院の患者共済会の関係でやつて居りますが、亡くなられる時に、私にそれを言つて居られました」とのべ、清水一隆は「父の遺言では、今まで定価四円で少し高過ぎた、それをもう少し安くして一般に使つて戴けるやうに、それから又先生方のお力によりまして、尚よりよい本にして永久に残して戴きたいかういつて居りました」という。いつからか印税は患者共済会にいれられるようにしてあったのである。しかし、死後の増補改訂版はでなかったようである。

ほかに清水の文章はないか、さがしたところ、『救治會々報』第五三号（一九三三年九月二〇日発行、特集「精神病者看護事業に関する諸問題」）に「最近五ヶ年間に東京府立松沢病院看護人が患者より受けたる傷害例。附、感想記」（五・五ページ）をみいだした。傷害例二七をのべたあと、「附、感想記」には、看護面を中心に松沢病院史をのべている。初期は「まるで動物園の猛獣扱いをして居つたのである」として、家人が希望するときは病室を密閉して病人を二、三人でおさえながら蕃椒いぶしをすることもある、とかく。そしてこの感想記は、つぎの文章をもってむすばれている――、

余は明治二十三年四月始めて故榊院長閣下の眷顧を辱うし、爾来今日迄四代の院長に任へて年を閲すること玆に四十三年、何のなす所もなく只夢の裡に過ぎ去り誠にお恥かしい次第であるが今眼を閉ぢて遙かに過去を追想するとき転た感慨無量である。当時三十七八の壮者であつた自称将軍芦原金次郎氏も今年は既に八十四才の春を迎へた。天下事あるごとにそれを論難批評して気焔万丈あたるべからず、常に奇異の行動と皮肉の口吻とを弄して万人を驚歎せしめ、一朝将軍の忌憚に触るれば直ちに腕力に訴へた彼も、今では座右に数匹の親猫小猫を撫で廻しながら微笑を童顔に浮べ、満洲もとう〳〵独立させてやつた、支那も俺れが行かなけや治まるまい杯と他愛もないこと云つてゐる。将軍閣下尚壮者を凌ぐの慨があるがその白髪、白髯を見ては共に老いたりの感が深い。

つぎに、精神科看護学書あるいは一般看護学書における精神科関係記載をみていこう。まず、精神科看護学書をみる。

①榊保三郎『癲狂院に於ける精神病看護學』（榊保三郎・東京市、非売品、一九〇一年八月）（B六判、緒言二ページ、本文四九

ペイジ）榊は榊俶前医長の弟で巣鴨病院医員兼東京帝国大学医科大学助手。一九〇一年二月から私的に看護学講習をひらいた著者が、この小冊子を巣鴨病院に寄付して講習の便にあてようとした。心得、精神症状略記、対症看護と、おおまかな考え方を中心にのべている。これがわが国で最初の精神科看護学書であった。

②門脇眞枝『精神病看護學』（博文館大橋新太郎・東京市、一九〇二年二月二一日）（菊判、序文・目次一四ペイジ、本文二三三ペイジ）門脇は当時巣鴨病院医員兼東京帝国大学医科大学助手（内表紙での肩書きは「医科大学助手」とだけある）。巣鴨病院医長を兼任していた医科大学教授片山國嘉の校閲をえて、その序あり。片山の序には「これ其看護の方法未だ普及せざるためなり、斯学の研究者門脇氏こゝに鑑みる所あり各所に該看護法の講演を試み今や精神病看護学といふ一書を草して余に示さる」とあり、門脇が巣鴨病院外でも精神病看護学を講習していたことがわかる。看護人心得、精神病学大意、危篤症にわけてのべている。危篤症のところは、精神科でみられる重症身体疾患につき略述している。榊のものは私家版であったので、公刊されたものとしては、これが最初の精神科看護学書となった。また門脇は文章家であったが、その面はこの書にもでている。

③森田正馬『根岸病院看護法』（根岸病院・東京市、非売品、一九〇八年九月）（B五判、序・目次計一四ペイジ、本文一三二ペイジ）森田は当時慈恵会医学専門学校で精神病学を講義しており、また根岸病院医長であった。「序」には、「此書は根岸病院普通看護人教習のため極めて通俗に、最も簡明に、其要を摘みたるものにして」とある。看護人心得、解剖生理、内科的看護法、外科的看護法、精神病看護法、伝染病看護法と、精神科看護人に必要なものを一般看護学までふくめてのべている。このうち「精神病看護法」は四四ペイジで、「精神病学の歴史」、「精神病」、「精神病の症状」、「病院内に於ける看護人一般の注意」、「必要なる精神病の一般療法」、「終結」の各章からなる。全文振り仮名つきで、精神症状も「まぼろし」、「考への間違ひ」、「ぼんやりの症」など、きわめてわかりやすく表現されている。「考への間違ひ」の項は、「精神病者には普通の人の考へて明かに其誤まれる事を知らるべき事を自ら真実の事と確信し決して

他の言を容れざる考へを有するもの多し、是等は皆精神の障害より起るものなり」とかきだされている（ここでいわれているのは、もちろん妄想のことである）。精神科看護学書というと今でも、むずかしい術語を羅列しているものがおおい。森田のこの書き方には、まなぶべきものがおおい。

これからずっとあとになるが、一九四一年に京都東福寺三聖病院長宇佐玄雄による『精神病の看護法』が、一九四二年には新潟医科大学精神科看護長高橋林助による『精神病の看護と治療法』が出版されたが、ここでは名をあげるにとどめておく。つぎに、一般看護学書にある精神科関係の記述をみていく。とりあげたのは、わたしたちの精神科医療史研究会が所蔵する看護学書および『近代日本看護名著集成』（大空社・東京、第Ⅰ期一九八八年、第Ⅱ期一九八九年、あとこれにはいっているものは「集成」と略記）に復刻されているものである。

④太田雄寧訳纂『看護心得』（英蘭堂島村利助・東京市、一八七七年五月一二日、集成）（ほぼB六判本文一九五ページ）関係記述はない。

⑤海軍医務局（訳）『看病要法』（一八七九年一一月一一日、集成）（ほぼB五判本文一六四ページ）ウィリアム・アンデルソンの著（一八七九年）による。失魂症に一・五ページ、発作諸病（ヒステリー、卒中、小児搐搦）に四ページ。

⑥足立寛『増訂日本赤十字社篤志看護婦人會教程』（日本赤十字社篤志看護婦人会・東京市、一八八七年初版、一九〇二年一二月二五日増訂版、一九〇五年三月八日増訂第七版）（B六判本文三六二ページ）「一般看護法」中に三ページの「精神病者看護法」の項があり、温和柔順に、精心錯乱せることをかたるな、自他傷害する者なり、飲食を忌避する者・逆にむさぼる者あり、衣類をきらい不潔する者、思想錯乱・五官機能変常から自殺・他傷をくわだてる者があるので小刀などないか注意、といった内容。ほかに癲癇に一・五ページ、失神及卒倒に二ページの記述がある。

⑦『陸軍看護學修業兵教科書』（小林又七・東京府、一八九〇年五月一四日、集成）（ほぼB六判本文二六五ページ）関係記述はない。

⑧高橋金一郎『通俗看病法』（大橋新太郎・東京市、一八九三年九月一一日、女学全書第一二編）（菊判本文一五一ページ）　このうち「狂者の看護」に三ページ。私人宅では無理、脳の病い、圧制法不可、看護する人は温籍・寛大・忍堪・慈悲心をもって病者をあわれめ、書籍・新聞の検閲、自殺の危険、産後狂疾、狂疾の血統、といった内容につき数行ずつのべる。

⑨佐伯理一郎訳補『普通看病學』（吐鳳堂田中増藏・東京市、第一編一八九五年四月二七日、第二編一八九五年八月二日、集成）（ほぼB六判で本文は第一編一五五ページ、第二編三八九ページ）　主としてビルロートの看護学書を訳したもの。第二編中の第七章が「神経病及精神病の看護法」（四一ページ）で、「神経病の看護法」（一三ページ）（このなかに癲癇、ヒステリアにつき記述あり）、「精神病の観察及看護法」（二五ページ）からなる。「精神病の観察」はエワルド・ヘッケル（破瓜病を記載した人である）の分類・観察（一八八〇年）を引用するとして、想像力の錯乱（癲狂）、精神鬱憂（理会力沈衰）の状態、精神興奮の状態（躁狂）の分類を説明している。精神病看護法はまずヘッケルにしたがって心得をのべ、ついでムンヂーの癲狂看護法により、自宅における看護法、無束縛法、束縛看護法、対症看護、職業〔作業〕および遊戯、家族風の癲狂保養園（ベルギーのヂュール）につきのべている。増訂第一四版（一九〇九年四月一〇日発行）（菊判本文四〇〇ページ）では、「第七章　神経病及精神病の看護法」は二六ページ。全体としては第一版と同文でヘッケルによる精神病分類もそのままであるが、家族風の癲狂保養園につづいて、京都岩倉村の癲狂患者保養園につきほぼ一ページ追加している。他の一般看護学書にみられぬほどに精神病看護法に力をいれており、しかも岩倉のことまで追加しているなど、精神科看護史のうえできわめて重要な本である。

⑩平野鐙編纂『看病の心得』（佐藤春・東京市、一八九六年五月五日、集成）（B六判本文一四八ページ）　著者は看護婦。卒中、卒倒症、癲癇、ヒステリアにつき記述六ページ。

⑪日本赤十字社編纂『日本赤十字社看護學教程』（日本赤十字社・東京、一八九六年六月七日、集成）（ほぼB六判本文五六七ペ

イジ）　実際は足立寛編集。「精神病者看護法」は三ページで、⑥のものとほぼ同文、病症に応じた看護、自体・他人の傷害に注意、の内容がくわわり、飲食に関しては人工栄養法のことがつけくわえられている。

⑫ヘレン・イー・フレーザー、成瀬四壽（し）訳『實用看護法』（福永文之助・東京市、一八九六年九月五日、集成）（ほぼB六判本文三六五ページ）　訳者は京都看病婦学校卒業生。失神、中風、癲癇、ヒステリーにつき四ページ記述。

⑬大關和子（わか）『派出看護婦心得』（中庸堂書店・東京市、一八九九年六月二三日初版、一九〇六年一二月三〇日第三版、集成）（ほぼB七判本文九六ページ）　著者は看護婦。関係記述はない。

⑭關藤治郎『普通臨床看病法』（誠之堂書店・東京市、一九〇〇年一月五日初版、一九〇七年一〇月一日第四判）（菊版本文一二七ページ）「精神病看護法」は一ページ強で、ほぼ⑪の抜き書き。

⑮大關和『實地看護法』（大關チカ・東京市、一九〇八年四月二二日）（ほぼB六判本文三三四ページ、集成）　関係記述はない。

⑯『看護教程』（小林又七・東京市、上一九〇九年四月八日、下一九〇九年五月一〇日）（B七判、本文は上三四七ページ、下三三二ページ）　はじめに陸軍省医務局長医学博士森林太郎の序あり、癲癇、卒倒に計三ページ、「精神病ノ看護」に三・五ページ、憐み、自他害・逃走に注意、飲食拒否、不潔、多言・沈黙・錯乱・五官異常を観察、物しずかに遇すべし、小刀などの扱い、書籍・書状の扱い。

⑰日本赤十字社編纂『甲種看護教程』（日本赤十字社・東京市、上一九一〇年四月一日、下一九一〇年五月二日、集成）（B六判で、上は本文三〇九ページ、下の本文は五〇八ページ）　下に「精神病の看護」二ページ、⑪の抜き書き。

⑱ナイチンゲール、岩井禎三訳『看護の栞』（日本赤十字社・東京市、一九一三年五月二五日、集成）（ほぼB六判本文二九六ページ）　関係記述はない。

⑲弘田長纂著『小児看護の栞』（金原書店・東京市、一九一五年六月五日、集成）（菊判本文一六二ページ）　関係記述はない。

⑳小池金之助『看護婦』（誠之堂書店・東京市、一九一五年九月一〇日、集成）（B六判本文一七二ページ）　著者は医療衛生行

政関係者。関係記述はない。

㉑越智キヨ『家庭看護法』（六盟館・東京市、一九一九年五月一二日）（A五判本文三二一ページ）著者は奈良女子高等師範学校教授で、同校生徒の教科書。「第十章　精神病者看護法」は一三ページ。病症中後天性精神病は鬱憂狂と躁狂とをあげる。看護法としては、病室、入院、束縛法、精神誘導法、飲食物をあげ、なかでも精神誘導法に二ページをさいて、作業として音楽、料理、読書、画まであげている。さらに精神病者監護法に五ページをさく。当時としてはめずらしく心くばりのゆきとどいた教科書である。

㉒井口乗海『看護學教科書』（文光堂書店・東京市、上は一九二一年九月二五日初版、一九二五年六月三〇日第七版、下は一九二三年三月九日初版、一九二五年一〇月三〇日第五版、集成）（A五判で本文は上が計二八一ページ、下が計三五三ページ）救急療法中で、脳貧血、脳充血、人事不省にふれるだけ。

㉓『衛生兵教程』（武揚堂書店・東京市、一九三二年一〇月一日）（B六判本文三一九ページ）「第八編　看護」六二ページ中で「第四章　精神病者ノ看護」は二ページで、⑯とほぼ同文。

㉔『軍隊衛生學』（成武堂・東京市、一九三二年一一月二九日）（A七判本文一六三ページ）「第八編　軍隊ニ多キ傷病及其予防法」三八ページ中で「第七章　其他ノ疾病　第三　精神病」は一・五ページ。おおく遺伝あり、精神病の素質ある者は元来精神薄弱、精神薄弱なる兵は平素保護につとむべし、精神薄弱者は逃亡・自殺がおおいので要注意、という内容。わるい意味で異色のものだが、ここの「精神薄弱」は「精神がよわい」の意でつかわれているのだろう。

㉕『看護學教程草案（救護看護婦用）』（日本赤十字社・東京市、第一巻・第二巻一九三七年四月一五日、第三巻一九三七年一〇月五日、集成）（ほぼA六判で本文は第一巻ほぼ六〇〇ページ、第二巻はほぼ五〇〇ページ、第三巻ほぼ二六〇ページ）第一巻中の「伝染病其ノ他ノ主ナル疾患」一三四ページ中で、「第十四章　主ナル精神病」は三・五ページで、早発性痴呆、偏執病、躁鬱病、麻痺性痴呆、変質症、先天性精神発育不全、老耄性痴呆につきごく簡単な説明。

㉖倉田包雄『看護學と保健學』（南江堂・東京都、前一九四三年八月二〇日、後一九四四年一一月二〇日、集成）（A五判で本文は前三四ページ、後一七七ページ）　関係記述はない。

以上、とりあげた一般看護学書の多くは、医師の筆によるものであった。それらは全体としては、精神科看護にたいしてはわずかしか配慮していない、あるいはまったく配慮していない、といってよい。そのなかで異色なのは、佐伯理一郎訳補『普通看病學』で、ビルロートの原著によるとはいえ、精神科看護にかなりのページをさき、さらに、のちの版ではわが国の事情も追加している。

ビルロートがひいているヘッケル（Ewald Hecker、一八四三―一九〇九）は緊張病を記載したカールバウム（Karl Ludwig Kahlbaum、一八二八―一八九九）の門下で、カールバウムがだした破瓜病の概念を発展させた人である。クレペリン（Emil Kraepelin、一八五六―一九二六）の早発痴呆（分裂病）概念（一八九六年）は、それらを発展させ統合したものであった。ところで、ヘッケルがあげる精神病分類はグリージンゲル（Wilhelm Griesinger、一八一七―一八六八）が提唱したもの（一八四五年）にならっているようである。クレペリンの体系が呉によってわが国に導入されてからは、ヘッケルの記載はあまりにふるいものとなってしまった。『普通看病學』が訳を中軸とする本であればやむをえなかったのかもしれないが、あとの版からはクレペリン体系による補足をすべきであったろう。佐伯の周辺にそれをたすける人がいなかったのだろうか。つまり、『普通看病學』はその初版においては精神科看護史上きわめて重要な意義をもっていたが、あとの版ではその意義を減じているのである。

もう一つの異色は越智キヨ『家庭看護法』である。一九一九年にでたこの本は後天性精神病としては鬱憂狂と躁狂とをあげるだけで、この点はクレペリン体系前のものである。だが、看護法のなかに音楽、料理、画まであげる心あたたかいものである。これが奈良女子高等師範学校生徒の教科書で、看護者のための教科書ではなかったことからすれば、精神病分類の面の欠陥はそれほど問題にはならない。いずれにせよ、越智のあたたかい心くばりの源泉がどこにあったか、興味

をそそられるところである。

他方で、わるい意味での異色は、遺伝を強調し、精神病の素質ある者は元来精神薄弱であるなど記述する『軍陣衛生學』である。一九三二年出版のこの本は、おそらく軍医によって執筆されたのだろうが、その軍医はどんな教育をうけていたのだろうか。戦前の医学教育における精神病学教育の不備がこういった本をうみだしたのだろうか。

その他の教科書における関係記述を通覧すると、おおきく二つの流れがうかびあがる。その一つは、失神、ヒステリー、癲癇など、神経症状といったほうがよい面の記述である。『看病要法』(一八七九年)、『看病の心得』(一八九六年)、『實用看護法』(一八九六年)、『看護學教科書』(一九二三年)の記載がそれである。

もう一つの流れは、患者取り扱いの心得をのべているもので、足立寛『増訂日本赤十字社篤志看護婦人會教程』(一八八七年初版)にそれははじまる。『日本赤十字社看護學教程』(一八九六年)、『普通臨床看病法』(一九一〇年)、『看護教程』(一九〇九年)、『甲種看護教程』(一九一〇年)、『衛生兵教程』(一九三二年)がこの流れに属する。これは日本赤十字社—陸軍衛生兵系といってもよい。このうち『看護教程』における記載はかなりことなった面をもつが、あとは最初の足立の記載をすこしかきなおし、増補したものといってよい。高橋金一郎『通俗看病法』(一八九三年)にある精神科看護面の記述は、足立の記載と内容、文章ともまったくべつのものだが、患者取り扱いの心得をのべているという点では、同方向のものである。

そして、さきにわるい意味での異色としてあげた『軍隊衛生學』は、この日本赤十字社—陸軍衛生兵系からはずれている点でも、やはり異色である。

このほかに『看護學教程草案』(一九三七年)は、主要精神病の名をあげてそれらを簡単に説明しているだけで、看護法にはふれていない。

このようにみてくると、一般看護学書中の精神科看護関係の記述は、あってもきわめて不充分なものであった。そして

唯一の例外といえる佐伯理一郎訳補『普通看病學』（越智キヨ『家庭看病法』は女子高等師範学校生徒のための教科書であるので）も、初版のときはべつにして、のちには時代遅れの内容であった。

ここで、はじめにあげた精神科看護学書をみると、榊保三郎『癲狂院に於ける精神病看護學』（一九〇一年）および森田正馬『根岸病院看護法』（一九〇八年）は、ともに非売品である。唯一公刊された『精神病看護學』（一九〇二年）は、初版のあと再版された形跡はない。精神科病院のすくなかった当時であるので、再版の需要はなかったのだろう。これらのあと宇佐玄雄『精神病の看護法』の出版は一九四一年、高橋林助『精神病の看護と治療法』は一九四二年である。ところで、精神科病床数の推移をみると、一九四一年を最高に激減していく。

このようにみてくると、清水の『新撰看護學　附精神病看護學』は、精神科看護を本格的にとりあげている、戦前を通じてほとんど唯一の看護書だったといってよい。看護人がかき一〇版をかさねたこの本が一般に注目されずにきたのは、なんとも残念である。おそらくは、この本はもっぱら精神科関係者のあいだだけに流布して、一般には利用されなかったのだろう。

ともかくも、この本をかいたというだけでも、清水耕一の名は記憶されるべきだろう。

貴重なご教示をくださった清水三郎氏および太田彰氏、『日本赤十字』につきご教示くださった長門谷洋治氏、調査の便をあたえられた日本赤十字看護大学図書館神戸恵子さんにお礼をもうしあげる。本稿の要旨は一九九一年一月二六日日本医史学会月例会で報告し、また、精神科看護書に関する部分は一九九〇年二月一七日精神科医療史研究会第三七回定例研究会で報告した。月例会で司会の労をとられた大滝紀雄氏およびご討論くださった諸氏、また定例研究会で討論してくださった小峯和茂、長谷川憲一、廣瀬樂、藤原豪、吉岡眞二の諸氏にも謝意を表したい。

三〇年間ともに精神科医療史探究をつづけてきた吉岡眞二氏は、一九九一年九月二六日に七〇歳になられた。本稿の資料の一部分は同氏の提供による。本稿を吉岡氏の古希にささげることにお許しをいただきたい。

注

（一）フィリップ・ピネル、影山任佐訳『精神病に関する医学＝哲学論』一八―二〇ページ、中央洋書出版部、東京、一九九〇年。

（二）“infirme atteint des humeurs froides”を、うつ病者ととる人もあるが、腺病（結核性頸腺炎）患者であろう。

（三）Weiner, Dora B.: The Apprenticeship of Philippe Pinel: A New Document, “Observations of Citizen Pussin on the Insane”. Am. J. Psychiatry 136 : 1128–1134, 1979.

（四）加藤普佐次郎（一八八七―一九六八）は一九一九―二五年と松沢病院医員として作業治療を実践した。のち主として開業、また賀川豊彦とともに医療生活協同組合運動にあたった。加藤著は一九六七年に關根眞一（一八九四―一九八一、一九二四年より松沢病院医員、一九三七―三九年と同副院長、一九四四―六六年と国立武蔵療養所長）により復刻されたが、やはり関係者に配布されただけであった。

（五）精神疾患患者の救護ではなくて一般傷病兵の救護である。対ロシヤ戦争のとき呉秀三、荒木蒼太郎ほかが内地の病院で、精神疾患にかかった陸軍軍人の診療にあたったことからみて、軍での精神疾患診療は後送病院でおこなわれたのだろう。対清国戦争のときどうだったか、資料はみていない。日本赤十字社により派遣されての清水の仕事はその後も一般傷病兵の救護であった。

（六）男の看護者の教育はわが国でこれが最初であったろう。加藤著に弔詞ののっている一人として桃原慶次郎がいる。かれの弔詞には、「役終りて帰るや君は動坂避病院の官舎にあり　余は其の附近に仮寓し赤十字の生徒として日々相携へ通学せり」とある。「動坂避病院」とは父君が門衛をされた駒込病院である。つづいて桃原は「業を終るや　君は職を巣鴨癲癇病院に奉じ　余は去って鎌倉脳病院に職を執る」とのべる。脳倉脳病院（現・藤沢病院）の設立は一九三一年で、「藤沢病院五十年記念誌」（一九八二年）の旧職員名簿に桃原の名はない。「脳倉脳病院」としたのは加藤の誤記のようであるが、桃原が精神科病院につとめたのはたしかなのだろう。また羽室晋「岩倉病院と其周囲」（『和光』第六巻第四号、一九三九年）には、岩倉病院の伊佐看護長は日本赤十字社看護長として一九〇四、五年戦争に従軍したとある。伊佐もこの養成所を卒業したのだろうか。戦前の精神科病院看護人の養成にとって、日本赤十字社準備看護人養成所はすくなからぬ役割りをはたしていたにちがいない（看護人養成は日本赤十字社の支社でもはじめられていたようである）。

（七）この存在は長門谷洋治氏よりご教示いただいた。

（八）呉秀三・三宅鑛一「六〇六号剤（さるわるさん）ヲ初期ノ麻痺性癡呆患者ニ応用シタル実験」『神経学雑誌』一〇巻（二号）、

四一～七一ページ、一九一一年。

(九) 亀山美知子『近代日本看護史 I日本赤十字社と看護婦』二五一～二五二、二八〇ページ、ドメス出版、東京、一九八三年。

(一〇) 金子嗣郎『松沢病院外史』一四二～一七一ページ（戦前における松沢病院の労働争議）、日本評論社、東京、一九八二年。

(一一) これらの看護科関係書類は廃棄されるところを吉岡によりすくいだされ、現在わたしたちの精神科医療史研究会に保存されている。

(一二) 加藤著には、「本年一月初頭石井子爵の荘重なる放送を承つて感激した」とある。石井はすでに官職をしりぞいていた。この年石井は古希にあたっていた。

(一三) なお座談会で磯田は、「その頃他の病院では狂騒と名をつけて居つたが、保養院では反対に鎮静室と名をつけたんです」とかたる。今日の保護室のことである。これは清水の識見がなみなみならぬものであったことをしめている。

(一四)『日本赤十字』は国会図書館所蔵本でしらべた。

(一五) 芦原の晩年をみた内村祐之院長はその病いを慢性躁病としたが、榊医長時代の診断は慢性錯迷狂であった。その後も中期までは妄想性癡呆（分裂病妄想型）とみる医師が大方であった。看護者はその生活態度から晩年でも芦原を分裂病とみていた。

(一六) 浦野シマ『日本精神科看護史』七〇～七一ページ、牧野出版、東京、一九八二年。

（精神科医療史研究会・東京）

年譜（関連事項は頭に○をつけた）

年	事項
1873（明6）	11月16日は福井県足羽郡松ケ枝下町三七番地にうまる、父惣平（旧福井藩士）、母その
1888（明21）	明進中学三年を中退、上京して夜学校
1889（明22）	4月10日巣鴨病院附添看護夫（日給15銭）、7月10日同臨時看護夫（日給15銭）、10月20日看護夫（日給16銭）
1892（明25）	翌年2月の死去まで石井邦猷氏に出張附き添い看護
1894（明27）	6月1日巣鴨病院看護夫を辞職して、日本赤十字社看護人採用試験に合格　9月1日より翌年6月17日まで日本赤十字社より救護員として朝鮮国、中国東北部へ派遣された
1895（明28）	○8月1日清国に宣戦布告 つづいて7月10日より12月10日まで台湾に派遣された
1896（明29）	○5月25日台湾島民反乱 2月10日勲八等瑞宝章および金三五円をさずけられた　6月1日日本赤十字社から金三〇円および金銀製手釦一対を贈与された 三陸海嘯にさいし6月より8月まで日本赤十字社救護員として宮古・釜石に出張　11月11日日本赤十字社病院養成所入所（第一回生）
1897（明30）	10月18日看護教程をおえて養成所を卒業（卒業生総代として答辞）、日本赤十字社準備看護人となる ○2月6日巣鴨病院榊叙医長死去、3月5日呉秀三医長心得（→医長）、8月5日片山國嘉医長
1899（明32）	11月11日巣鴨病院看護長を拝命（月給一二円）
1900（明33）	6月30日巣鴨病院看護長を免職され、日本赤十字社看護人組長として病院船博愛丸にのりこむ　11月16日巣鴨病院看護長に復帰（諸港結氷のため） ○清国で義和団の乱より北清事変 4月より医員二名とともに看護講習(?) 4月16日巣鴨病院看護長を免職され、病院船弘済丸にのりこむ、6月に任務終了　11月10日東京精神病院（11月5日開院→のち保養院）看護長に就職 ○4月永松アイ巣鴨病院看護指導に任ぜられる　10月31日呉秀三巣鴨病院医長（04年院長）
1901（明34）	

年	事項
1902（明35）	3月15日発行『日本赤十字』第一〇八号より「精神病看護法」を連載（03年11月15日発行の第一二八号まで一〇回？）　北清事変の功により金五〇円および銀時計をおくられた
1903（明36）	フランス共和国政府より金製名誉記章を授与され、また日本赤十字社看護人長に任ぜられた ○4月東京精神病院で労働争議（？）
1904（明37）	2月16日召集されて日本赤十字社看護人長として博愛丸にのりこみ、翌年まで往復五〇有余回 ○2月10日対ロシヤ宣戦布告
1905（明38）	12月27日東京にもどる
1906（明39）	1月29日呉院長により巣鴨病院看護長に復帰　対ロシヤ戦争の功により勲七等青色桐葉章および金一八〇円を授与された
1908（明41）	12月25日『新撰看護学』初版発行（南江堂）
1910（明43）	7月9日乃木希典将軍巣鴨病院見学、このときの芦原将軍との会見記をかく
1911（明44）	11月9日をもって巣鴨病院看護長を辞して、日本赤十字社第一救護団看護人長兼書記として中国に従務

年	事項
1912（明45）	○10月10日中国で辛亥革命はじまる 3月25日巣鴨病院看護長に復帰　日本赤十字社より特別社員に列せられた　中華民国大総統黎元洪より行賞銅板を授与された
1917（大6）	○石橋ハヤ巣鴨病院看護長となる
1918（大7）	7月22日をもって巣鴨病院看護長を辞し、日本赤十字社救護書記としてウラジオストク、ハルビンなどの病院に勤務 ○8月2日政府シベリヤ出兵を宣言
1919（大8）	7月31日巣鴨病院看護長に復帰 ○9月29日巣鴨病院永松アイ看護長辞職 10月6日加藤普佐次郎医員就職　11月7日巣鴨病院より松沢病院へ移転、そのまえに看護人の労働条件改善をもとめる動き シベリヤ出兵時の功により金一四〇円を給された
1920（大9）	平和記念東京博覧会出品委員をおおせつけられた　大正4年乃至9年の戦役時の功により金四〇〇円をたまわった
1921（大10）	9月1日の関東大震災にあたり、多年の野戦経験をいかして奮闘 ○10月松沢病院で労働争議
1923（大12）	1月26日摂政宮御成婚式挙行にさいし、社会事業功労者として宮内省より表彰され、
1924（大13）	

年	事項
	御紋附金盃および金二〇〇円をたまわった 3月20日松沢病院で表彰祝賀式
	○3月松沢病院で労働争議　9月關根眞一医員就職
1925（大14）	1月20日『新撰看護學』第九版 ○3月松沢病院加藤医員辞職　6月30日呉秀三院長退職、三宅鑛一院長に昇任
1930（昭5）	○4―5月松沢病院で労働争議
1933（昭8）	8月25日『新撰看護學』第一〇版
1934（昭9）	10月胆石症により東京帝国大学医学部附属病院島薗内科に入院し年末に退院
1935（昭10）	2月2日胆嚢炎により死去（死亡時月給一〇五円）
	○7月14日追悼座談会（『脳』）
1936（昭11）	○7月10日加藤普佐次郎『至誠の人清水耕一君』発行
1967（昭42）	○11月4日關根眞一により『至誠の人清水耕一君』再版
1981（昭56）	○4月5日松沢病院桜友会による清水耕一看護長を偲ぶ会

Shimizu Kôichi (1873—1935): Author of "A New Textbook of General Nursing and Psychiatric Nursing"

by Yasuo OKADA

Shimizu was employed as a male attendant at the Tôkyô Prefectural Mental Hospital at the age of 17. In wartime he worked as a member of a contingent of the Japan Red Cross Society. In 1897 he finished the one-year course of nursing at the Central Red Cross Hospital. He must have been the first Japanese psychiatric nurse who was trained as a nurse.

Shimizu, as the male head-nurse of the Tôkyô prefectural mental hospital, assisted Superintendant Dr. Kure Shûzô in reforming the hospital to the non-restraint systsm. In 1908 he published "A New Textbook of General Nursing and Psychiatric Nursing", which allotted many pages to psychiatric nursing. In prewar Japan almost all textbooks of nursing paid little or no attention to psychiatric nursing. Shimizu's textbook ran into the tenth edition. He died as the present male head-nurse at the age of 61.

One might say that Shimizu was to Superintendant Dr. Kure as was Jean-Baptiste Pussin to Philippe Pinel.